

文化財サポーターによる文化財めぐり

崇福寺・高島秋帆旧宅

発行日 平成 19 年 11 月 11 日

発行所 長崎市魚の町 5 - 1

長崎市教育委員会

生涯学習部文化財課

095 - 829 - 1193



崇福寺大雄宝殿（国宝）



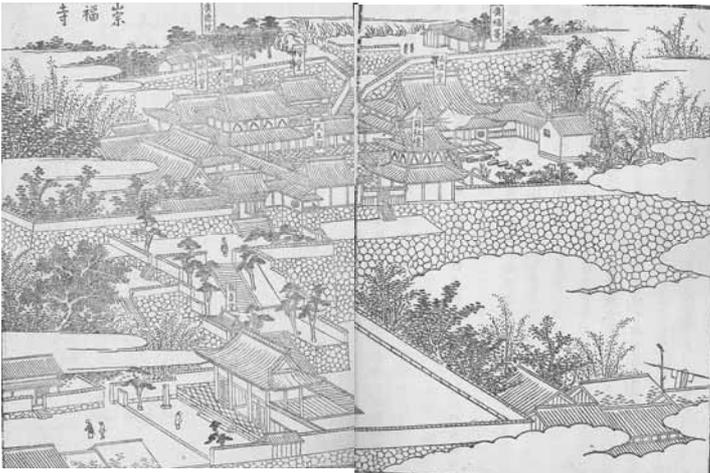
垂花柱

正保3年（1646）、何高材の一手寄進により最初は単層で創建されました。市内に現存する最古の建物です。後、天和元年（1681）頃、魏之琰の寄進により重層化されました。和様を基調とした上層部が黄檗様の下層部と違和感なく調和しています。一見して珍しいのは軒下に垂れ下がった垂花柱（ぎゃくぎぼしづか逆擬宝珠束ともいう）です。また当初材には広葉杉が使われています。

日時 平成19年11月11日（日） 10:00～12:00
コース 崇福寺～高島秋帆旧宅
主催 長崎市教育委員会
解説・案内 田川 文夫／平川 辰興／宮崎 健（長崎市文化財サポーター）

聖壽山崇福寺

寛永6年(1629)、福州地方出身の唐商らの招きに応じて唐僧超然が渡来し、寛永9年(1632)寺創立の公許を受け、寛永12年(1635)に初めて殿堂がおこされました。後、明暦元年(1655)には隠元禅師が入り、臨済宗黄檗派(隠元らは自らが直系だと主張し「臨済正伝」と称しました)寺院となり、中興開山即非以後、八代大成^{だいじょう}までは唐僧が住持を勤めましたが、その後唐僧の渡来が途絶えたため九代以降は和僧^{わそう}が寺を守ってきました。明治7年(1874)に一旦臨済宗に合併させられましたが、2年後の明治9年(1876)に「黄檗宗」という一宗派として独立するに至っています。現在は京都府宇治市の黄檗山万福寺を本山としていますが、江戸時代の唐寺は末寺ではなく「別格地」として、享保年間までは唐三ヶ寺のうち然るべき僧が住持として万福寺に上っていました。



文政年間(1820年頃)の崇福寺(『長崎名勝図絵』より)

崇福寺三門(楼門)(国指定重要文化財)

創建は寛文13年(1673)ですが、まだこの時は龍宮造りではなく三間一戸八脚^{はっしやくきん}門入母屋造単層の木造の門と思われる。明和3年(1766)の大火により焼失し、文化12年(1815)に再建したものと思われ、今度は文政11年(1828)の台風により再び倒壊してしまいました。現在見られる龍宮門形式の門は嘉永2年(1849)に大串五良平^{ごらへい}を棟梁として起用し、建立されました。五良平は日本人と思われていましたが、現在では中国系工匠だったのではないかと考えられています。

七宝透かしの張り出した高欄や門扉につけられた獣環^{じゅうかん}が特徴で、第一峰門の軒下と同じく上階には中国の吉祥文様や宝尽し等が彩り



獣環

豊かに描かれています。

崇福寺第一峰門(国宝)

創建は寛永21年(1644)ですが、現在の門は元禄9年(1696)に再建されたものです。改築の際元禄7年(1694)に寧波^{ニンポー}で広葉杉^{こうようぎん}の木材が切組まれ、翌年数隻の船に分けて舶載され、当地で再建されました。



四手先三葉拱斗拱

四手先三葉拱斗拱^{よてさきさんようきょうとぎょう}と呼ばれる組物が特徴で吉祥文様が極彩色で描かれています。臺座^{わらざ}(扉の軸受)が瓶型になっているのも珍しい点です。

崇福寺本堂の仏像群(釈迦三尊と十八羅漢)

(県指定有形文化財)

釈迦三尊像は承応2年(1653)に何高材^{げしゅ}が化主(寄進集めの世話人)となり徐潤陽ほか2名の仏師の手になるものです。構造は中空の乾漆造りと思われ、内部に銀製の五蔵、布製の六腑等があり、わが国の仏像としては極めて珍しいものです。

十八羅漢は延寶5年(1677)に完成し、以前は范道生が制作したものと考えられていましたが、釈迦三尊像内部から羅漢寄進者の名が出てきたことから、三尊像と同じく徐潤陽ほか2名ではないかと思われ。構造は中空の寄木造りで麻布を張り漆をかけて作られているようです。

崇福寺護法堂(国指定重要文化財)

享保16年(1731)に建立され、向って右の関羽を祀っている方が関帝堂、左の韋駄天を祀っている方が天王殿、中央が観音堂で、統一した名称として堂内の扁額「護法藏」に因んで護法堂と名づけられたのは明治43年(1910)のことです。礎盤には鹿、唐獅子、麒麟等の霊獣や、梅、蓮が彫刻されています。

崇福寺鐘鼓楼(国指定重要文化財)

正保4年(1647)頃創建の重層八(六)角円堂の鐘楼は現在の八坂神社に近い寺地の南隅にあり、当時は唐船から航海の神様を祀る媽祖堂が媽祖門と共に望むこと

ができました。

現在のものは、中国で広葉杉を切組み主要木材とし、唐船で舶載・輸入され、荒木治右衛門により享保13年（1728）に再建されたものです。

崇福寺梵鐘（県指定有形文化財）

正保4年（1647）に鍛冶屋町の鑄物師阿山家の初代が鑄造したものです。初代が作った梵鐘は六つありましたが、この鐘を除き、改鑄されたり石火矢と化したり戦時中供出されたりしてしまいました。当時の壇越名とその寄進額が刻まれています。

崇福寺媽姐門（国指定重要文化財）

寛文6年（1666）に創建され、文政10年（1827）現在の門に再建されました。媽姐堂の前にあり、大雄宝殿と書院玄関をつなぐ渡廊下を兼ねた巧みな配置になっています。平成元年（1989）の保存修理工事により、媽姐門中央筋より前の地盤が埋立地で、後は地山を削り出したものであることが判明しました。

崇福寺媽姐堂（県指定史跡）

創建の時期は詳らかではありませんが、崇福寺開創時には建立されていたものと考えられ、少なくとも明暦年間（1655～1658）には既に存在していたと思われます。寺院内に媽姐堂を持つのは長崎の唐寺だけです。もともと唐寺は黄檗僧が渡来する以前から航海の安全を祈願して媽祖を預かり祀る寺院として建立されたことに関係していると思われます。左右の壁には停泊唐船の媽祖像を安置するための菩薩棚があります。

基壇上の卍字崩しの木製高欄が特徴で、また媽姐門との間には、唐船の媽祖像の揚げ卸しの儀式に必要な空間として石畳が敷かれています。

崇福寺大釜（市指定有形文化財）

萬人鍋とか済貧鍋とも呼ばれる、深さ約 1.73m、直径 約1.86mのこの巨大な釜は、天和2年（1682）に鍛冶屋町より車に乗せて運び入れ、大雄宝殿前に据え付けられ、一度に米 630kg（約4石2



「大釜」『長崎名勝図絵』

斗 = 4,200合)を炊き飢饉に苦しむ 3,000人に施粥したと伝えられています。

崇福寺蔵 仏舍利塔並びに舍利殿（市指定有形文化財）

即非禅師が朝夕参拝し、必ず唐僧に伝えて大切にせよと言いつたもので、長崎に伝承された中国様式の工芸品として、その価値が十分に認められます。なかの水晶と真鍮製の舍利塔は中国からの舶載品ですが、外の舍利殿は中国製か日本製か判明していません。

高島秋帆旧宅（国指定史跡）

高島秋帆【寛政10年（1798）～慶応2年（1866）】

高島家は代々、長崎の町年寄の名家でした。寛政10年（1798）高島四郎兵衛茂紀の三男として長崎に生まれた秋帆は、父に荻野流砲術を学び、オランダから銃砲や砲弾の鑄型を輸入し、西洋式砲術を研究しました。

アヘン戦争(英国に清国敗退)の情報を受けた秋帆は、外国勢力に対処するため、海防等の備えと西洋の軍事技術の導入を説き(「天保上書」43歳)翌年武蔵国徳丸原(現在の東京都板橋区高島平)での西洋式訓練を実施しました。

しかしながら、一部の者のねたみにより天保13年(1842)無実の罪で捕えられました。嘉永6年(1853)に釈放された後まもなく、開国の必要性を幕府に建議し(「嘉永上書」56歳)晩年は幕府の砲術教授を務めるなど軍制改革に貢献しました。慶応2(1866)年江戸で69年間の波瀾の生涯を閉じました。墓も当地にあります。寺町の高島家墓地(市指定史跡)にも、秋帆と家族の墓碑が門人によって建てられています。

高島秋帆旧宅（国指定史跡）

高島秋帆旧宅は、秋帆の父・四郎兵衛茂紀が文化3年(1806)別邸として建てたもので、「雨声楼」と呼ばれました。高島家の本邸は長崎奉行所西役所(現在の長崎県庁すぐそば)大村町(現在の万才町・長崎家庭・簡易裁判所)にありましたが、天保9年(1838)の大火事で消失したため、別邸「雨声楼」に移転してきました。1階の座敷には長崎派の代表的な画家・石崎融思の爛漫と咲きほこる桜花が描かれていました。

しかし天保13年(1842)秋帆45歳の時、無実の罪で

捉えられて以来、ここに戻ることはなく、門弟の中島名左衛門が住みました。

さらに文久3年(1863)からは料亭「咲草屋」。明治3年(1870)からは料亭「宝亭」を営業。同41年所有権が第3者に移り、大正5年(1916)に廃業。大正11年10月史蹟名勝天然記念物保存法により指定史跡に指定されました。なお、大正6年5月、芥川龍之介が訪れた時は、待合「辰巳」でした。そして、昭和20年8月9日の原爆で大破しました。



高島秋帆別邸(桜の間)

高島秋帆が研究した銃砲類

【モルチール砲(白砲)】

高島流の代表的砲種。山頂や城内など直視できない目標に対し、近距離から45度以上の曲射弾道で発射。大型榴弾・焼夷弾・照明弾用。他にもホーイツスル砲、野戦砲等を長崎から江戸に持ち運び演習を行いました。



モルチール砲 天保6年(1835)
武雄市教育委員会所蔵



モルチール砲(部分)
抱き銀杏家紋象嵌
武雄市教育委員会所蔵

【ゲペール銃】

秋帆は、天保3年(1832)に2挺、1835年には最多の46挺注文しています。

参考文献

- 「高島秋帆~西洋砲術家の生涯と徳丸原」板橋区立郷土資料館
- 「中島川遠目鏡」宮田安 長崎文献社
- 「高島秋帆」有馬成甫 吉川弘文館

高島秋帆略年譜

元号	西暦	年齢	秋帆事跡	関連記事
寛政10年	1798	1	長崎町年寄高島四郎兵衛茂紀の三男として長崎に生まれる	
文化3年	1806	9	父四郎兵衛茂紀が小島村に「雨声楼」を建てる	
文化5年	1808	11	父四郎兵衛、フェートン号事件において出島を守る	英艦フェートン号長崎港侵入
文化6年	1809	12	父四郎兵衛、坂本孫之進について砲術を学ぶ	幕府、荻野流砲術師範坂本孫之進を長崎に派遣。この年より文化14年までオランダ船の長崎入港が断絶する
文政元年	1818	21	秋帆、長崎会所調役となる	
天保3年	1832	35	秋帆、父四郎兵衛とオランダより銃砲や兵術書の輸入をはかる	
			モルチール砲をオランダに注文	
天保5年	1834	37	「和蘭歩兵操典」等洋書及び歩兵銃25挺入手	
天保6年	1835	38	秋帆、佐賀武雄藩を訪れ、日本ではじめて鑄造したモルチール砲を譲渡	
天保8年	1837	40	秋帆、町年寄本役となる	
			肥後藩のためにモルチール砲を鑄造する	
天保9年	1838	41	大火事で大村町の高島家本邸焼失する。鳥居平八兄弟入門	
天保11年	1840	43	秋帆、天保上書を提出して、西洋砲術採用を説く	
天保12年	1841	44	幕命により、江戸徳丸原で西洋砲術演習を行う	
天保13年	1842	45	ざん訴により逮捕され、翌年江戸伝馬町へ送られ投獄される	
弘化元年	1844	47		水野忠邦、老中へ返り咲き、鳥居耀蔵解任
弘化3年	1846	49	秋帆事件の判決下る。秋帆は中追放。岡部藩安部虎之助にお預けとなる	
嘉永3年	1850	53		江川太郎左衛門、伊豆葎山に反射炉を築く
嘉永6年	1853	56	秋帆、釈放されて江川太郎左衛門に引き渡される。江川邸にて砲術演習	
			秋帆、嘉永上書を幕府に提出。開国の必要を建議	
			高島喜平と改名	
安政2年	1855	58	築地講武所竣工。秋帆教授方頭取に任じられる。品川台場(砲台)完成につき賞賜、御普請役になる	日蘭和親条約調印。長崎海軍伝習所を設ける。江戸湯島鑄砲場で洋式小銃製作決定
安政4年	1857	60	秋帆、講武所砲術師範役となる	
万延元年	1860	63	小石川小十人町に住居転居、神田小川町の講武所竣工	
慶応2年	1866	69	正月14日、講武所師範役の現職にあつて、小十人町の自宅で病死 本郷大円寺に葬られる	